

彼女が浴衣に着替えたら

著者／流遠亜沙

ASSAULT-SYSTEM 文庫

2 彼女が浴衣に着替えたら

八月が終わりに近づいているにも関わらず、日中はまだ暑い。夕方になっても劇的に涼しくなったりはせず、空調の効いた室内から出たくないというのが本音だ。

なのだが――

「……暑い」

俺はなぜか、また蝉の声が鳴りやまない近所の道を、神社に向かって歩いていく。

前述の通り、夕方になっても快適な気温にはならない。思わず愚痴が出てしまうのは仕方ない。

しかし、俺のすぐ隣を歩いている少女は、まるで彼女の周囲だけ気温が違うのではないかと疑ってしまうくらいに涼しげな表情をしている。

長く艶やかな黒髪と、少し吊り目がちな橙色の瞳が特徴的で、大和撫子といった雰囲気漂わせる。身長は年齢相応だが、プロポーションはかなり良い。すらっとした体型でありながら、胸元の自己主張は同年代の女子の追隨を許さない。

彼女の名前はヤミヒメ。

ツィエス
ZS学園高等部に通う二年生で、俺のクラスメイトだ。そして、今では同じ家に住んでいる親戚同士でもある。

「口に出すと余計に暑くなるぞ?」

先ほどの俺の呟きに対し、少女――ヤミヒメは暑さなど微塵も感じていない様子で言った。

「俺は心頭を滅却したり出来ないんだよ」

「アサトは精進が足らん。そんな事だから、タオエンからダメ人間呼ばわりされ続けるのだ」

ずいぶんと時代がかった口調だが、ヤミヒメはまぎれもなく十七歳の女子高生だ。今風に言えばJKだ。ちなみに、タオエンというのはヤミヒメの妹である。

「ふん。別に実害がある訳でもなし、好きに言わせとけばいい」

「そういう発想がダメ人間と言われる所以ゆえんだというのに……」

「俺はダメ人間として強く生きていく。それが俺の生き様だ」

「そんな生き様は捨ててしまえ」

ヤミヒメと他愛ない会話を交わしながら歩を進める。同じ屋根の下で暮らすようになって割りと経つが、不思議と会話の内容には困らない。正確に言うなら、会話の内容は似たり寄ったりだが、それが気にならない。もっと言うなら、別に会話が途切れても気まずくならない。

そういう関係性を、俺は好ましく思っている。

3 彼女が浴衣に着替えたら

むしろ、そういう関係性を築ける相手でない、同居は不可能だろう。ヤミヒメとタオエン、そして末っ子のベアトリーチェ。三人ともタイプはまるで違うが、それなりに上手くやれている自信はある。それは彼女等が仲の良い姉妹であるが故なのかもしれない。

「……全員で来られなくて残念だったな」

俺とヤミヒメが向かっている神社は夏祭りの会場で、本当ならタオエンとベアトリーチェも一緒に来るはずだったのだが――

「風邪では仕方あるまい。あの熱で出歩かせる訳にはいかん」

昨日までは健康優良児そのもので、夏休みを満喫していたベアトリーチェだが、今朝から微熱を出して寝込んでいた。彼女を一人置いていくのも忍びないので、夏祭りに行くのは中止するはずだったが、ベアトリーチェが屋台のメニューを食べたいと言うので、こうしてヤミヒメと二人で向かう事になった。

ちなみに、タオエンはベアトリーチェの看病のために残っている。

「……だが、こうして私だけ浴衣を着て祭りに行くのは少々、気が引けるな」

苦笑気味に言うヤミヒメ。その顔には、浴衣を着られた嬉しさと、祭りに行けなかったベアトリーチェに対する罪悪感が混在しているように見えた。

ヤミヒメは断ったのだが、せっかく祭りに行くなら着るべきだというタオエンの勢いに押されて、彼女は今、浴衣に身を包んでいる。ピンクと言うには赤みが強いマゼンタの生地を、黒い帯で縛った、ややショッキングな色合いだが、それは恐ろしいくらいにヤミヒメに似合っていた。

容姿が容姿だけに、ヤミヒメは和服が似合う。正月の晴れ着もそうだったが、やはり和服と相性が良いのだろう。

「着せたのはタオエンだし、ベアトリーチェも楽しんできてって言ってたんだ。お前が気に病む事ないだろ」

「……そうだろうか？」

「ああ。問題は、二人でどれだけ土産みやげを買って帰れるかの方だ。少なかったらへソ曲げるぞ」

ベアトリーチェの注文は、『食べものは全種類 最低一人前は買ってきて』――だった。看病で残ったタオエンの分も、という事だろう。屋台の種類自体はそう多くはないはずなので、そんなに大した量にはならないと思うが。

「ふふ。確かにそうだな」

ヤミヒメの声に明るさが戻る。

「私達は、言わば使い走りにされたのだ。働かされる分、楽しんでも罰は当たらんだろう」

4 彼女が浴衣に着替えたら

「そういう事だ。せいぜい楽しんで、土産話で悔しがらせてやればいい」

正直、俺は祭り自体はどうでもいいし、出来るなら俺が看病で残りたいくらいだった。けど、夜にヤミヒメとタオエンを一人だけで行かせる訳にもいかない。俺とタオエンという組み合わせは端はなからないので、必然的に現状の組み合わせに落ち着く。俺一人で四人分の屋台のメニューを買って帰るのも、量的に無理だしな。

それに――

「おお！ 今年の会場は、去年よりも屋台が多いのではないか？」

浴衣を着て、普段より少しはしゃいでいるヤミヒメを見られるなら、暑さを我慢して出歩く価値はあるだろう。



「――ふむ。とりあえず、一通りは回ったか」
「だな」

会場をざっと見て回り、屋台の種類や値段の相場も把握出来た。あとは実際に買って帰るだけだ。

とはいえ、結構な人混みの中を歩いてきたので、俺達は買い物始める前に小休止を挟む事にした。途中の屋台で買ったラムネのビンびんを片手に、休憩所にいくつも設置してあるベンチに腰を落ち着ける。和風茶屋の雰囲気を出すためか、赤い布がそれっぽく敷いてある。

ビンの蓋ふたの役目をしているビー玉を押し込み、開封する。その際に中身のラムネが零れこぼて手が濡れるのは、愛敬あいきやうだろう。ビンを傾け、中身を口に含む。冷えたラムネが乾いた喉のどに心地良い。

「けど、この量でこの値段っていうのは、ぼったくりだよな」

「野暮な事を言うでない。これから、そのぼったくり商品をいくつ買うとっておる」
「お前もぼったくりだと思ってるんじゃないか」

「今のは言葉の綾あやだ」

ラムネの甘味で疲れを癒しつつ、ビンの中身が空になると、俺はヤミヒメの分のビンを受け取ろうとした。ビンを屋台に返すと、引き換えに十円くれるという古風なシステムがあるのだ。

「ん。頼む――」

ヤミヒメが空のビンを俺に差し出す。わざわざ一緒に返しに行く必要もないからだ。

しかし――

「あ――」

それはどちらの声だったのか。ビンを受け取る際、互いの手がわずかに触れてしまうという、恥ずかしいくらいにありふれたシチュエーションが現実で起こってしまった。ラムネのビンというのは意外と小さい。高校生の手の大きさだと、こういう事態が起きても仕方なくらいに。

「えっと……じゃあ、行ってくる」

「う、うむ……」

同じ屋根の下で暮らすようになって、ずいぶんと経つ。元々、親戚なので、今では家族に近い感覚すらある。それでも、俺達は年頃の男女であり、ヤミヒメを異性として意識しないはずもない。幼いころから知っているからこそ、日々の変化にも気付く。お互いにもう、小さな子供ではないのだから。

ビンを返して休憩所に戻り、ヤミヒメの分の十円を手渡す際も、妙に意識してしまい、硬貨を落としそうになってしまった。ヤミヒメも同じなのか、先ほどから、俺と視線を合わせようとしていない。

この空気は――気まずい。

こんなシチュエーションはフィクションだ。漫画や小説、アニメや映画でも使い古されている。傍観者なら登場人物達の甘酸っぱい様子をニヤニヤしながら眺めていればいい。しかし、当事者はどうすればいい？　こういう時、先達は――ラブコメの主人公達はどのようにしてきた？

……駄目だ。あの手のヘタレ主人公達は、何もしないし、何も出来ない。状況に流されていくだけだ。例えば、ヒロインの方が会話の口火を切って、状況を動かしたりするのだ。

「――なあ、アサト」

そう、こんな具合に。

「ん？」

「その、なんだ……今更なのだが、今日の私はどうだろうか。タオエンに言われて、髪も下ろしてみたのだが」

そう言つてヤミヒメは、普段ならポニーテールの付け根が来るであろう、自分の後頭部付近を撫でた。心なしか、頬が上気して見え、今のヤミヒメは妙に艶めかしい。

「ああ……普段と違って、良いんじゃないか」

当然、ヤミヒメの髪型が普段と違ってしている事には気付いていた。だが、そんな事を指摘して、更に褒めろというのは、男子高校生には難易度が高すぎる。結局、俺はヤミヒメに

6 彼女が浴衣に着替えたら

何も言つてやれず、タオエンの『ヘタレですね』という蔑みの視線を戴いただけだ。俺はマゾではないので、ご褒美でもなんでもないが。

「……普段と違うから新鮮というだけか？ それとも、普段通りに縛っている方が好きなのか？」

明らかに不貞腐れた口調でヤミヒメが絡んでくる。これは明らかに俺が悪い。ヤミヒメが言つてほしいのは、そんな言葉ではなく、それは俺も判っている。だが、思春期男子の無駄に過剰な自意識は、彼女が求めている類の言葉を言わせてくれない。

有体に言えば——恥ずかしくて言えない。

本当に、男というのはどうしようもなく子供だ。

だが、言い訳をさせてもらえるのであれば、甘い言葉を言つてほしいという女子の願望も大概だ。どうやら、男子が思っている以上に、女子というのはベタな台詞やシチュエーションが好きらしい。

「……………」

「ぬう……………」

ヤミヒメの機嫌が目に見えて悪くなる。どうする？ ここで言つべき言葉は何だ？

①髪、下ろしてるのも良いな。浴衣も似合ってる。

②今日のお前は、すごく色っぽいよ。

③俺、ポニテ萌えなんだ。

咄嗟に三つの選択肢が浮かんだが、③は気が動転していた事にして無視する。

②……は無理だ。俺のキャラじゃない。

なら消去法で①か。充分に気恥かしいが、ヤミヒメはこう言つてほしいはずだ。

言え。お前はヘタレなラブコメ主人公達とは違う事を証明してみせろ。

「……………ヤミヒメ、髪を下ろしてるのも良——」

一世一代の覚悟をし、顔が沸騰しそうになる台詞を吐こうとした時——ヤミヒメが俺の胸元に、しなだれかかのように身を寄せてきた。顔と胸をぴたりと接触させ、両手は俺の肩に置かれている。

「や、ヤミヒメ…………？」

悲しいかな、状況に理解が追いつかず、声が裏返ってしまった。

それでも、自分の名前を呼ばれたためか、彼女は顔を上げ、頬を紅潮させ、潤んだ瞳で俺を見上げてくる。

これは完全にキスのシチュエーションだ。

なんだ？

7 彼女が浴衣に着替えたら

焦れてヤミヒメの方からお膳立てをしてくれたのか？

それにしたって唐突だし、そもそも、ヤミヒメはこんなに積極的な行動を取らない。むしろ、俺と同じタイプのはずだ。

それが、なぜ？

「んう……アサト……はあはあ……熱いよ」

切なげな吐息を漏らし、濡れた声でヤミヒメが呟く。

まるで熱に浮かされているように。

……ん？

ほんの少し前に、同じような表情を見た記憶がある。その人物は体調不良で、熱があつて、意識もぼんやりとしていた。

「ちよつと失礼」

「ふえっ」

ヤミヒメの額ひたいに手のひらで触れる。じんわりと汗ばんだそこは——熱かった。

「……ヤミヒメ、これは何本だ？」

俺は右手でピースサインを作り、密着状態の妙に色っぽい幼馴染の眼前に掲げた。

「……アサト、いやらしいぞ。それは……んう……男女の……まぐわいを……はあはあ……意味する……サインだ」

頬ほおを赤らめ、俺を叱るような事を言っているが、言葉は途切れ途切れで、途中からは完全に呂律ろれつが回っていない。

顔が赤い。目が潤んでいる。視界、並びに意識がはっきりしていない。

これはベアトリーチェと同じ——風邪かぜの症状だ。恐らく、感染源はベアトリーチェだろう。となると、家で看病をしているタオエンも危ない。そして、それは俺もだ。

「——すぐに帰るぞ」

「なにを……いつておる……のだ。うたげは……ふう……まだ……これから……はあ……あろう？」

力なく抵抗するヤミヒメを強引に背負い、俺はその状態で買えるだけの屋台のメニューを買い、まっすぐに帰宅した。

余談だが、両手の土産と、人間一人の重さを支えて歩くのに精一杯で、背中当たる二つの膨らみの感触を楽しむ余裕はなかった。

なお、帰宅後、なぜかタオエンだけは熱を出さず、ヤミヒメと俺を加えた患者三人の世話を一人こなすはめになった事も記しておく。

8 彼女が浴衣に着替えたら



あとはあれだ。ラブコメの主人公達はヘタレだが、それはあまり責めないでやってほしい。きっと彼等も、彼等なりに大変なんだと思うから。

彼女が浴衣に着替えたら 了

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

ソイエス
Z S 〈ゾイドチック・ストラテジー〉『彼女が浴衣に着替えたら』をお届け致します。

前回の『Z S』はアサト視点のベアトリーチェ回でしたが、今回はヤミヒメ回です。前回の話を書いて、アサトが三姉妹をどう思っているかを改めて書くのもいいかもしれないと思い、こういう内容になりました。ヤミヒメ視点で、言いたいけど言えない的な、切なくも乙女チックな内容も考えたのですが、それはまたの機会に。

ローテーション的に次はタオエン回ですが、近いイベントはハロウィンなので、イラストを描くならベアトリーチェなんですよね……このシリーズはイラストありきなので。

それでは、良きところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。

この作品は二人の看板娘がヒロインとして登場します。

比較的、正統派ヒロインに近い長女・ヤミヒメ（ツンデレ）。

主人公に好意がなく、姉妹を溺愛している次女・タオエン（クールビューティ毒舌）。

見た目はロリだが、中身はあざとく計算高い三女・ベアトリーチェ（小悪魔）。

こうして見るとバランス良く配置されていますし、それぞれに人気が出ると嬉しいなと思っ
て書いているので、お気に召した娘こがいたら応援してやってください。

2015／8／21 流遠亜沙

アンケートに答える

『Z S 〈ゾイドチック・ストラテジー〉』ページに戻る